

学名(ラテン語)のカナ表記についての試論

辻野 匠¹⁾

1. はじめに

学名はラテン語で書かれるが、学名に^よ呼び方(この「よむ」は読解ではなく呼称なので「呼む」と宛てる)やカナ表記(カナ書き)を与えるのはけっこう難しい。理由の1つは決まった発音がないことである。現代語であれば、現地での発音に近い転写という方法が一般にとられるが、ラテン語では不可能である。ラテン語は科学技術のみならず、西欧世界全体の基礎であるが、ラテン語を母語として修得した人はおらず、現地音が存在しない。逆に西欧世界の基礎となったために、それぞれの言語(英国やフランス、イタリアやドイツ、スペインなど)にあわせたラテン語の呼び方がある。

ラテン語のいろいろな呼び方の事例について、古代ローマ世界でもっとも著名な人物Julius Caesarの呼び方を例にあげよう。なお、各言語の音はカナでは到底表記できないのではあるが、読者の便宜を図ってカナ書きすると次のようになる。

この人物、古典ラテン語(ローマ時代の発音を再現したもの)ではユリウス・カエサルのように呼ばれるが、英語ではジュリアス・シーザー、フランス語ではジュール・セザール、イタリア語ではジュリオ・チェーザレ、ドイツ語ではユリウス・カイザー、スペイン語ではフリオ・セーサルとなる。日本語では、時に古典語風のユリウス・カエサルというカナ書きもなされるが、英語風のジュリアス・シーザーのほうも使われる。

このように、ラテン語の呼び方をめぐってはいろいろな方法が乱立した状態で、それぞれの現代語においては体系化されているが、世界的に統一されていない。当然ながら日本においても定まった方法がなく、いろいろな呼び方が混乱して用いられている。地質標本館・博物館などで、一般市民、特に学童へ

普及するためには、どう呼むかを示すことが重要である(古くはFenton, 1937)。しかし、学術論文では学名のみを表記し、呼び方は示さない。そのため、普及者側がしばしば悩む問題である。本稿では、様々な体系におけるラテン語学名の呼び方を概観し、日本で通用している呼び方の法則性を試論した上で、カナ表記としてどうあるべきか検討する。地質ニュース誌上では山田(1978)がラテン語の紹介をして以来の試みとなる。また、本稿の内容を逆に利用することによって、外国人の学名の発音についても見当をつけられるのではないかと期待される。なお、発音記号については簡単な説明を加えたが、より詳しい説明は小泉(2003)、Pullumほか(2003)や国際音声学会編(2003)が参考になる。

2. 各言語における呼び方

ラテン語の各言語における発音は第1表のようにまとめられる(MacGee *et al.*, 1996)。発音には大きな変異があるとはいうものの、かなり多くの文字(27文字中11文字)は共通の発音をしている。

2.1 古典的ラテン語での呼び方

古典ラテン語ではローマ字呼びが基本である。母音a, i, u, e, oはアイウエオのように呼び、英語のように、エイ、アイ、ユー、イー、オウとは呼まない。厳密にはuは日本語のウよりも口を丸めた(円唇)音だが、カナ書きではウと書く。以下、注意すべき点を列挙する。

bはバ行の頭子音[b]でほとんど問題がないが、bs, btという綴字の時はps, ptと無声音化(乱暴に言えば清音化)する。

cは常に[k](カ行頭子音)になる。英仏語ではi, e

1) 産総研 地質情報研究部門

キーワード: ラテン語, 学名, カナ書き(カナ表記), 振仮名

第1表 ラテン語の各言語別発音比較表.

字	古典式	ドイツ式	教会式	フランス式	英式	カナ表記
a	[a]ア	←	←	←	[ei æ]	ア
b	[b]バ行	←	←	←	←	←
c	[k]カ行	[ts k]	[tʃ k]	[s k]	←	カ行 ⁰¹ , [サ カ] ²
d	[d]ダ行	←	←	←	←	←
e	[e]エ	←	←	←	[i: ε]	エ
f	[f]ファ行*	←	←	←	←	←
g	[g]ガ行	←	[ɣ g]	[ʒ g]	[ɕ g]	ガ行 ⁰¹ , [チャ ガ] ²
h	[h]ハ行	←	無音	←	[h]	ハ
i	[i]イ	←	←	←	[ai i]	イ
j	[j]ヤ行	←	←	[ʒ]ジャ行	[ɕ]チャ行	ヤ行 ⁰¹ , チャ行 ²
k	[k]カ行	←	←	←	←	←
l	[l]ラ行*	←	←	←	←	←
m	[m]マ行	←	←	←	←	←
n	[n]ナ行	←	←	←	←	←
o	[o]オ	←	←	←	[ou o]	オ
p	[p]パ行	←	←	←	←	←
q	[kʷ]クッ行	[kv]クヴァ	[kʷ]クッ行	[k]カ行	[kʷ]	クッ行
r	[r]ラ行*	←	←	←	←	←
s	[s]サ行	[z]ザ行	[z s]	←	←	サ行
t	[t]タ行	←	←	←	←	←
u	[u]ウ	←	←	[y]ユ*	[ju: A]	ウ
v	[v]ワ行	[f]ファ行*	[v]ヴァ行*	←	←	ワ行 ⁰ , ヴァ行 ¹²
w	未成	[v]ヴァ行	?	[w]	ワ行	ワ行
x	[ks]クス	←	[gz ks]	[ks/s]	[gz ks]	クス
y	[y]ユ*	←	[i]イ	←	←	ユ ⁰ , イ ¹²
z	[z]ザ行	[ts]ツァ行	[dz]ヅァ行	[z]	←	ザ行
ch	[kʰ]カ行*	[x ç]ハ* ヒ	[k]カ行	[ʃ]シャ行	[tʃ k ʃ]	カ行 ⁰¹ , [チャ カ] ²
ph	[pʰ]パ行*	[f]ファ行	←	←	←	パ行 ⁰ , ファ行 ¹²
ps	[ps]プス	←	←	←	[s]サ行	プス
th	[tʰ]タ行*	[t]タ行	←	←	[θ]サ行*	タ行 ⁰¹ , サ行 ²
cc	[k]カ行	[kts]	?	[s]	[ks]	[カ サ クス]
gn	[gn]グヌ	[ŋn]	[ɲ]ニャ行	←	[ŋgn]	[グヌ ニャ]
sc	[sk]スク	←	[ʃ sk]	[s]	[s sk]	[スク サ]
sch	[skʰ]スク	[ʃ]シャ行	[ʃ sk]	[ʃ]	[sk]	スク

上段に1文字のアルファベット, 中段にギリシャ語からの借入語に多い綴り, 下段に俗ラテン語以降にできた綴り(しばしば現代語に含まれる)を示した. カナ書きの*は近似的な表記で, 音声学的には明確に違うことを示す. たとえばファの子音は[f]ではなく[ɸ]であり, ヴァの子音は[v]ではなく,[b]または[β]で, faをファ, vaをヴァと書くのは近似音による代用である. [x | ç]などの | は前後の綴りにより発音が異なることを示す. 通用は本文で述べているように混乱しており代表的なものだけを掲げた. 0.「正則の古典式カナ表記」, 1.「現代的子音の古典式カナ表記」, 2.「ヘボン式カナ表記」. 簡略化のため割愛した表記もある. たとえばrの音が各言語によって様々で一律に[r]とはいえないが, いずれの場合もラ行で受けるため割愛した. 一方で, ジャとチャは戦後の現代仮名遣いでは書きわけないが, ここでは精密化のため書きわけた.

の前のcは[s]になる一般則がある(たとえば, cinema/シネマ/, ciell/空, シエルまたはシェル/)が, 古典ラテン語ではそういう変則はなく, 常に[k]である. 一方, kは古典ラテン語ではほとんど使われず,

Kalendae(朔日, 英calendarの語源)などで使用されるのみである. もとのラテン語がkを使わなかったので, 後裔のイタリヤ語, フランス語, スペイン語及びポルトガル語でもkは固有語には用いられず, 外来語の

みに使われる。

chはギリシャ語の χ を転写するために工夫された綴り方で、もともとのラテン語にはないが、ギリシャ語からの外来語に使う(例chronology)。発音は[k^h]で、右肩のhは帯気音を示し、強く息を吐く[k]の音である。日本語では語頭のカ行が[k^h]になることが多いが、音韻として区別しないためカ行として表記する。

gは常に[g] (ガ行頭子音)になる。英仏伊語では、i、eの前では音が変わって英語や伊語では[ɟ] (英Japanのj、チャの子音が近い)、仏語では[z] (英visionのs、仏Japonのj、ジャの子音が近い)となるが、古典ラテン語及びドイツ語では常に[g]である。たとえば英語風にはgeologyはジオロジー、pangea(又はpangaea)はパンジアであるが、ラテン語として発音するならばゲオロジー、パンゲアとなる。カナ書きでは、geologyは英語風を書くが、pangeaはドイツ語のパンゲアが通用している。後述するが、カナ書きではいろいろな言語の呼び方が混同して使われている。

jは常に[j] (ヤ行の頭子音)になる。英仏語とは違う。英語では[ɟ], 仏語では[z]となる。たとえば、ローマ神話の最高神であり、木星の謂れにもなっているJupiterは、英語ではジュピターのように発音されるが、古典ラテン語では、ユピテルとなる。なお、古典時代にはjの文字はなく、iの字が母音の[i] (イ)も子音の[j]も表していた。たとえば、JupiterはIVPITERと綴られていた(vについては後述)。

phもchと同じで、ギリシャ語転写用(Φ)に工夫された綴り方で、ギリシャ語からの造語に多い(例philosophy)。発音は強く息を吐くp[p^h]である。日本語では語頭のパ行の音になる。英語など現代西洋語では[f]として発音する。

qは古典ラテン語では常にquの形で用いられて、[k^w]の音価となる。Aquaはラテン語で水を意味し日本でもよく知られており、アクアとカナ書きされることが多い。厳密に古典式に則ればアクワとなる。なお、現代語ではカンタス航空(Qantas Airways)に献名されたQantassaurusなど、quではない綴りもある(発音は[k^w])。

sは常に無声音(乱暴に言えば清音)[s]になる。英仏伊語では母音に挟まれたsは有声化(乱暴に言えば濁音化)して[z]の音になる一般則があるが、古典ラテン語では違う。saurusはザウルスではなくサウルスとなる。

tは常にタ行の頭子音[t]で、英仏語ではtioやtiaという綴りでtが[t̥]になることがあるが、ラテン語は常に[t]である。

thもchやphと同じで、ギリシャ語転写用(θ)である。強く息を吐くt[t̥]で、日本語では語頭のタ行の音になる。英語では[θ] (例think)の発音だが、独仏伊語ではtと同じ[t]の発音をする。

rは巻舌のrで、英語の-erのようにアーとはならず、カナ書きではラ行になる(参考: Jupiter, 英ジュピター、ラユピテル)。rhという綴字はギリシャ語転写用(ρ)で、強く息を吐くr[r^h]だが、これもラ行としてカナ書きする。

vは常に[w] (ワ行頭子音)になる。[v]ではないので注意されたい。たとえば、virusはウィルスとなる(英語ではヴァイラス)。なお、jと同様、古典時代にはuとvの文字の区別はなく、wはなかった。vの字が母音の[u]も子音の[w]も表していた。通行字体はVのほうだった。Vは直線的で、石碑に彫るのに好都合だったからかもしれない。BVLGARIはuの音にあえてvを宛てることで伝統的なイメージを醸し出しており、現在も使われ得る用法といえる。

xは常に[k^s]となる。英語ではanxiousは[k]だが名詞のanxietyでは有声音の[z]になる。しかし、古典ラテン語ではそういう複雑な変化をせず、常に同じ発音である。

yはギリシャ語からラテン語が借入した語に対して用いる。ギリシャ語のϝを正確に翻訳するために帝政ローマ時代に作成されたもので、音価は[y]である。[y]の音はドイツ語のüのユの音(例Hütte^{ヒュッテ})、仏語のuの音(例Côte d'Azur^{コート・ダジュール})である。ユとカナ書きされるが日本語にはない音である。日本語のユの音は伸ばすとウになるが、[y]はいつまで伸ばしてもウにならない。

zもyと同じくギリシャ語を正確に翻訳するためにギリシャ語のζから導入された文字で、音価は[z]、[ɬ]、[zd] (wisdomのsd)の音である。前者はラテン語としての音で、後二者はギリシャ語としての音である。

ラテン語では母音に長音短音の違いがある。日本語は長短の違いを区別するので古典ラテン語に近く、現在の英仏伊西の各言語では長短の違いがないことと対照的である。ヨーロッパ語族の古典語では長短の区別があるものが多い。古典ギリシャ語もそうだが、

英語も古英語(6世紀あるいはそれ以前から12世紀の英語、日本の奈良時代～平安時代にほぼ相当)では長短の区別があった。

長短の区別は重要で、たとえば日本語でもローマ字でKozoと書けば、コーゾーさん(孝蔵など)なのか小僧^{コゾウ}さんなのか去年^{コゾウ}なのかかわからない。そのためJames C. Hepburnのローマ字(後のヘボン式ローマ字のもとになった、日本で最初の本格的英語辞典の作成者)ではKōzō, Kozō, Kozoと区別し、田中館愛橘(日本式ローマ字の創始者)ではKōzō, Kozō, Kozoと区別した。ラテン語も長短が違ふと意味が違ふので辞書には長短が表記されている。ただし、学名には明記されていない。

2.2 教会式(イタリア語式)の呼び方

イタリアはローマ帝国の首都であったところで、イタリア語はラテン語の直系の子孫であるが、かなり古典式との間に違いがある。この違いは、他の言語での呼び方の基礎となるもので、かつ、教会(カトリック)で広く用いられているため、ラテン語の呼び方において古典式と双璧をなしており、重要である。以下に簡単に触れる。

cはi, eなど舌が前に出る母音の前だと[tʃ](チャ行に近い)になるが、a, u, oだと[k](カ行)になる。ただしchは常に[k]となる。だからイタリア語風にChikyuを呼ぶとキキュー(気球?)になる。gはi, eの前だとジャ行になり、a, u, oだとガ行で、gnの綴りではニャ行になる(例。Bolognaボローニャ, Fossa magnaはフォッサマーニャ)。xは原則的には[ks]だが、母音に挟まれると[gz]になる。zはツァ行またはヅァ行である。また、母音はae, oeなどの二重母音は全て短母音[e]として呼ぶ。したがって、cae, coeはチェになる。また、フランス語と同じでhは無音である。

2.3 ドイツ語式の呼び方

ドイツの神聖ローマ帝国はその名のとおりにローマ帝国を受け継ぐというスタンスだが、ドイツ語とラテン語は直接の系統関係にない。もちろんどちらも同じヨーロッパ語族だが、細かく見るとドイツ語はゲルマン語派(英語やオランダ語が親戚)であるのに対して、ラテン語はイタリック語派でイタリア語、フランス語、スペイン語及びポルトガル語の祖先となる言語である。日本は明治・大正期にドイツから科学・技術用語を大量

に借入した。ナトリウム(ラテン語Natriumのドイツ語呼び、英Sodium)やメタン(methan英語風にはメサイン/ミーサイン)など現在でもドイツ語風の呼び方は使用されており、注意が必要である。

cはイタリア語風の呼び方と同じ傾向を示す。e, ae, oe, i, yの前では[ts](ツァ行の頭子音)になるが、それ以外では[k]のカ行である。chはBach(バッハ)のようにa, o, uの前では[x](強く喉が鳴るハの音)と呼ばれ、iやeの前ではFriedrich(フリードリッヒ)のように[ç](ヒ)と呼ばれる。母音の前のsは常に[z]となる。vは, volks wagenのvのように[f]として呼ばれる。wは[w]ではなく[v]の音で呼ぶ。それ以外はほぼ古典式と同じである。特にgが変化しないことが注意を要す。というのはcとgは日本語でいえば清音と濁音の違いで、他の言語では片方が変化していればもう片方も変化している(第1表)ののだが、ドイツ語ではgは常に[g]の発音である。また、jやhなど(第1表)、他の言語では変化してしまったのにドイツ語式では古典語と同じ発音をするものが比較的多い。注意すべきは連母音で、euは[oi], eiはEinsteinアインシュタインのように[ai]となる。

2.4 フランス語式の呼び方

フランス人はラテン語をフランス語のように呼ぶらしく、大西(1997)によると「Amis de la prononciation française du latin(ラテン語のフランス語式発音愛好者の会)」があるという。

フランス語風の呼び方ではいろいろ注意が必要で全部を網羅できないため、一部だけ記す。子音では、cがイタリア語同様、後の文字によって発音が変わる。a, u, o及び子音の前で[k]となり、i及びeの前で[s]となる。同じことはgにもいえ、続く母音によって[g]となったり、[ʒ](ジャ行に近い)と発音し分ける。chは[ʃ](シャ行に近い)となる(例Michel/ミシェル)。jはヤ行ではなく、[ʒ]となる。母音のuは、これまでの古典式、教会式及びドイツ語式は全て[u]の音だったが、フランス語はこれを[y]の音として発音する(古典式のyと同じ発音)。[u]の音はouという綴りが受けている。aiは[ɛ], auは[ɔ]でeuは[œ]か[ø], oiは[wa]となる。母音+n/mなどの場合、鼻母音として発音し、アクセントがないeは[ə](曖昧母音。フランス語のカナ書きではウ段の音)となる。また、語末のtが黙字になることがある(例:debut/デビュ)。

2.5 英語風の呼び方

英語風の呼び方は、子音に関してはこれまで述べた方式の中間的な方法で、とりたてて困難ではないが、もっとも困難なのは母音字である。母音字は長母音(二重母音を含む)として呼ぶ場合と、短母音として呼ぶ場合とで発音が異なる。具体的にはa, i, u, e, oは長母音として呼べば[ei], [ai], [ju:], [i:], [ou]だが、短母音として呼べば,[æ] (cap), [ɪ] (skip), [ʌ] (cup), [ɛ] (pet), [ɒ] (top)となる(phonics)。ただし、英国英語か米国英語かによっても発音が異なる母音も多い。長母音はABCDEFGH...とアルファベットを呼ぶ時の呼び方と同じである。開音節(母音終わりの音節)の母音は長母音として、閉音節(子音終わりの音節)の場合は短母音として呼ぶという一般規則がある。もともと英語の単語については、どこに音節の区切りがあるのかは綴り字とアクセントから見当がつくようであるが、ラテン語に対して英語のこの規則を適用しようとする、どこにアクセントがあるかわからないため、どこで音節が切れるのかも見当がつかず、呼び方がわからないことがある(和田, 1989)。英語自体、上述の原則がありながら綴りの呼び方規則が確立していない部分があり、個別に覚える必要がある語が多い。たとえばPolishとpolishは同じ綴りであるが発音は違う。二重母音字は例外が多いが、auは[ɔ:], euは[ju:]となる。

異同の多いc及びgの音は、cは基本的には仏語と同じだが、gはイタリア語と同じで変則的な傾向を示す。hは[h]として発音し、フランス語やイタリア語とは違い、むしろドイツ語のほうが近い。一方、s, v, w, x, zはフランス語と同じである。中間的な方法と述べた次第である。またchはいろいろな発音がある。churchのようにももとの英語の単語では[tʃ]の音が多いが、charisma, chimera, Christのようにギリシャ語からの借入語は[k]となるし、Chicago, chef, machineのようにフランス語からの借入語は[ʃ]となる。

2.6 各言語における呼び方の背景

ラテン語に対して西欧ではそれぞれの言語に基づいた呼び方があるのは、(1)同じアルファベットを用いているので、同じように呼みたい；(2)自分たちの言語の起源となった古典語であるために、現代語の延長で呼みたいといった理由が考えられる。

(1)については、それぞれの国で教育をする際に、歴史的に現地語に準拠した呼び方になってしまうこととも関係しているだろう。(2)は、丁度、日本の古典語を現代日本語の発音で呼ぶのになんの違和感もないのに似ている。たとえば奈良・平安時代には「は行」はファ行またはパ行だったと復元されている。だからといって「衣ほすてふ天の香具山」を「コロモポステプ...」とは呼んだりせず、「コロモホスチョウ...」と呼ぶ。それと同じかもしれない。ラテン語は後裔ではないドイツ語や英語に対しても多大な語を提供した。これは丁度、漢字が日本や韓国に対して多大な語を提供したのに似ている。1つの漢字に対して、中国語(漢語)での呼び方があり、韓国語での呼び方があり、日本語での呼び方がある。漢語の中でも北京語、上海語、台湾語に広東語などいろいろな呼び方がある。それと同様にラテン語に対しても、イタリア語、フランス語、ドイツ語、英語など多様な呼び方があるのかもしれない。

一方、古典式で呼もうというのは、漢籍を漢籍が書かれた当時の発音(たとえば「史記」であれば秦漢時代の上古音、李白なら唐代の中古音)で呼もうというのに似ているかもしれない。古典ラテン文献を古典学者が研究するのなら、それも一理ある。ただ、古典と関係のない、科学・技術の分野のラテン語を呼ぶ際にそれを適用するのが妥当かどうかという問題がある。ところで、ラテン語と中国語とは重要な点で違う。中国語の発音は現在もそうだが、過去においても外国人には難しいため、正確に発音できない場合が多いが、古典ラテン語の場合は簡単な音韻体系なので西欧人や日本人が古典式に発音することは技術的には可能である。もっとも例外はあって、英語話者の場合、古典式風にeの長音を発音しようとしても[e:]ができないので、[ei]となることが多いようだ。たとえばCaesarの‘vĕnī, vidī, vīcī’(来た、見た、買った)のvĕnīをヴェイニと呼ぶ。

3. 日本で通用している呼び方

日本で通用している学名ラテン語の呼び方は2種類に大別できる。古典式と英語風の呼び方であり、それぞれいろいろな派生系を含む。

3.1 古典式準拠の呼び方

古典式に準拠した呼び方は広く日本で通用している。ただし、古典式といっても長短は無視され短音として表記されることが多い。理由の1つには、ラテン語の長短はラテン語辞書を見ないとわからないためと考えられる。更に、学名ラテン語はラテン語といっても現代語からの造語や、現地の地名人名のラテン語化 (tokyoensis, yezoensis, yabei など) など、長短やアクセントがもともと存在しないものも多く、また、ラテン語ではアクセントと長短は密接に関係しているので、片方が決まらないうち片方も定まらない (呉・泉 (1977)・山田 (1978) 参照) ため、長短を区別することが難しく、短音として表記されるのだろう。これは学名ラテン語に限らず、ローマ帝国時代の人物も日本語では長短を無視して短音として表記されることが多い (Julius はユーリウスと表記してもいい筈だが、ユリウスと表記される)。それは古典ギリシャ語も同様で、ソクラテスも長短を厳密に表記するなら、ソークラテースと表記すべきだが、そうっていない。プラトーン (プラトン) も然り。ただ、全面的に短音として統一されるのではなく、部分的に長音が残っていたりと混乱した状態にある (例、ハーデースをハーデス)。それでも、長短を短音に統一する傾向はかなり通用しており、学名の呼び方を決める際にも無視できないものと思われる。

古典式準拠の呼び方であっても、個々の子音字をどう呼ぶかは必ずしも古典式どおりではない場合がある。たとえば、ph は第1表のように古典式では [p^h] (p の帯気音、強く息を吐くパの子音) で、無理にカナ書きすればバ行になるが、古典語以外のヨーロッパの言語では [f] で呼ぶ (第1表) し、その関係もあって「ファ」行としてカナ書きされていることも多い。Coelophys は恐竜の1つで、真正に古典式ではコエロピューシスとなるが、一般にはコエロフィシスと呼ばれる。th も古典式では [t^h] (t の帯気音) だが、英語で [θ] と呼び、教会式をはじめドイツ式やフランス式では [t] である。ph に倣って英語風にするならば「サ」行としてカナ書きされるべきであるが、実際は、タ行としてカナ書きされることが多いことから、英語風ではなく、ここは古典式や教会式、ドイツ式などの発音が取り入れられていることがわかる。Acanthostega は初期的な両生類で、カナ表記は古典式風のアカントステガの呼称が定着している。v も古典式では [w] でありワ行だが、学名のカナ書きではヴァ行のことが多い。Velociraptor

は小型の肉食恐竜で映画「ジュラシックパーク」でも有名になったが、これはウエロキラプトルではなく、ヴェロキラプトルまたはペロキラプトルとカナ書きされることが多い。Vicarya は日本の中新統からよく産出する巻貝でヴィカリヤまたはビカリヤと表記されている。ウィカリヤという表記は管見では知らない。これらの呼び方は古典式準拠だが子音だけ現代化(?) した呼び方といえる。なお、カナではヴァ行で表記してあっても発音はバ行と同じ ([b]) で、ペロキラ…やビカリヤという表記も認められている。

古典式準拠であっても y を i として呼び換えることが一般に行われている。これはもともとギリシャ語の y [y] を [i] に呼び換える場合と、人名地名や外国語の借用などで、もともと y が [i] または [j] の音価だった場合と2種類ある。ギリシャ語の場合は、Tyrannosaurus をテュランノサウルスと古典式の正則通りにカナ書きする場合もあるが、ティラノサウルスといった y を i に呼び換えるカナ書きも多い (この例ではそれとは別に nn のカナ書きにも揺れがある)。恐竜の Deinonychus をデイノニクス、Ankylosaurus をアンキロサウルス、魚竜の Ichthyosaurus をイクチオサウルス、軟体動物の Vicarya をビカリヤ、Glycymeris をグリキメリスと多数の例がある。動物だけに限らず、珪藻の Cyclotella もキクロテラ/シクロテラ、Hyacinthus (ヒュアキントゥス) もヒヤシンス、植物では phyllon (葉) という語尾の植物が多いが、フィルンと呼ばれることがある。接頭辞で crypt- (隠れた) という語があるが、これもクリプトよりはクリプトのほうがよく使われている。

人名地名や外国語の借用による y の [i] または [j] への呼び換えについては、たとえば Mizuhopecten yessoensis, M. tokyoensis (ホタテ) や Cervus nippon yesoensis (エゾシカ) の例があげられる。yessoensis や yesoensis は「蝦夷産の」、tokyoensis は「東京産の」だから、これを杓子定規に y を [y] としてユェツソエンシスとかトーキュオエンシスとカナ書きするのはかえって混乱を招くことになるだろう。混乱を避けるために古典式で呼んだ時に正しい発音になるよう、学名をつける際に地名のほうをラテン語化する人もいる。「蝦夷産の」場合は jezoensis になる。実例としてはエゾマツ Picea jezoensis がある。本稿の範囲を超えるが、学名の形成法としてはこちらのほうが筋がよいかもしれない。学名をつける際に地名・人名はラテン語化する慣習があるからである。これに倣うと、ロー

マ字表記のYesoをラテン語化すれば、yはヤ行[j]なのでJesoとなり、地名から形容詞を作る-ensisを継いでjesoensisとなる。ただし、古典式では正しく呼めるが、逆に英語風に呼まれてしまってジェゾエンシスなどとjを英語のjのように呼ばれる危険もある。

また、全体的には古典式に準拠しているが、cまたはgだけ英語式の場合もある。たとえば、アンモナイトに多い-cerasは古典式ではケラスだが、セラスとカナ書きされることのほうが多い。二枚貝の*Inoceramus*は古典式に書けばイノケラムス(例:地学団体研究会編(1981)の地学事典)だが、イノセラムス(例:地学団体研究会編(1996)の地学事典(新版))のほうもよく知られている。英語式にするならば、語尾の-musはマスになるが、イノセラマスとは書かないことから、その方法も古典式の変則に位置づけられる。なお、-cerasの意味は角で、アンモナイトが羊の角のように見えることから名付けられた。類語にタンパク質のceratinがあり、角質に由来している。このceratinはケラチンとカナ書きされ、セラチンとはならない。

3.2 英語風呼び方

英語式の特徴の第一は開音節と閉音節で母音の発音が違うことである。語尾の-usとアス(Julius, ジュリアス)と呼むのがその典型である。この方式では*Dinosaurus*のdinoを古典式のディノと呼まずにダイノと呼む。この方法の利点は英語風なので、英語で発音するときそのままに近い格好で呼めることである。ただし、英語風の転写を徹底せずに、中途半端に英語風にしたカナ書きがある。たとえば*Chaetoceros*という珪藻がいる。古典式にはカエトケロスだが、英語風ではシートセロスとなり、中途半端にキートセロス、シートケロス、キートケロスといった表記もある。よくあるのが前半が古典風で後半の語尾(-usなど)だけ英語風にするものである。プナは学名では*Fagus*、英語風ならフェイガス、古典式ならファーガスだが、折衷的にファーガスとカナ書きするのがそれである。*Dinosaurus*であれば、英語風を徹底すればダイノソーラスになるはずであるが、ダイノサウルスやダイノサウルスと折衷的に英語風発音が混じっていることがある。

また英語風カナ書きには、短母音のo (top, hot, dog)を英国英語風にオと転写するか米国英語風にアと転写するか、という揺れがある。たとえば

*Coscinodiscus*という珪藻がいる。古典式ではコスキノディスクスだが、英語風ではカ(ッ)シノディスクス、コ(ッ)シノディスクスという2種類の表記が可能である。

英語風の呼び方では、二重子音のうち最初の子音が黙字になることがある。たとえばpsychology(心理学)はギリシャ語のpsychē(心、プシュケー)から造語された言葉であるが、psyをプサイと呼まずに、pを黙字としてサイコロジーと呼ぶ。恐竜に、*Psittacosaurus*というのがあるが、古典式準拠のカナ書きであれば、プシッタコサウルスのようになるが、英語ではpが黙字になり、シッタコソーラスというようになる。ニセのという意味でpseudo-という接頭辞があるが、古典式ではプセウドになるが、英語風にはシュードと表記される。折衷的なプシュードという表記も見掛ける。翼竜の*Pteranodon*は、英語風には語頭のPが黙字になってテラドン(さらに言えばeはイなのでティラドン)になるが、よくある表記はプテラドンである。ギリシャ語には二重子音の語が多数あり、学名ラテン語でも使っている場合が多い。英語風の表記では二重子音の後半だけしか表記されないの、ほかの言葉と紛らわしくなる。たとえば、ティラドンはティラノサウルスのティラノ(「乱暴な」)と共通かのような印象(「乱暴な歯」?)、正しくはpter-は翼の意)を与えてしまう。

4. 考察

古典学者は当然ながら古典式の発音を推奨している(呉・泉, 1977; 大西, 1997; 逸見, 2000; 風間, 2005など)。これは英語圏の教科書(Wheelock and LaFleur, 2005; Morwood, 1999)でも同じで、古典式の発音を紹介している。一方、学名など学術用語のラテン語は古典文献を表現するための言語ではないし、様々な言語が外来語として混じっているため、発音を確立することが困難である。

たとえば、Stearn (1992)は学名ラテン語についての著述で、英語圏には英語風(traditional English pronunciation)と古典式準拠('reformed' academic pronunciation)の二種類の呼び方があることを紹介している。前者は園芸家や植物学者によって使われており、後者はヨーロッパ大陸での呼び方(教会式・ドイツ式・フランス式など)に近い利点があるとした上で、母音の長短とアクセントを正しく発音すればどちらの呼び方でも通じるとしている。その上で、どの方法で

も、地名・人名などの外来語の発音を定める決定的な方法はないことを指摘している。理想的には外来語の部分は現地語呼みして、ラテン語(十ギリシャ語)の本来語は上の方法で呼ぶことを提案しているが、どう呼ぶかわからない、結局、自国語呼みになってしまうという問題がある。が、そうであっても大抵の植物学者や園芸家はわかると結論づけている。これらの提言は非常に示唆的である。

まず、英語風のカナ書きから考察する。英語風はアクセントや音節の認定を確実にできないと発音を決めることが難しい。実際、英語話者であれば誰でもラテン語学名の発音をすらすら決め得るというわけでもない。日本人であれば尚更である。たとえば、*Ampelopsis brevipedunculata*という学名(ノブドウ)の英語風カナ書きを書けるだろうか? 属名は短かいのでまだ簡単だが、この種小名のような長い語は英語は苦手とするところで、どう音節を区切るのか、どこにアクセントを置くのかよくわからないだろう。地質学者にはよく知られた *Inoceramus*も発音困難な語の一つである(Fenton, 1937)。甲 *in-o-cer-a-mus* であれば、イノセレイマスになるが、乙 *in-o-cer-á-mus* であればイノセレイマスで、丙 *in-no-cer-a-mus* であればアイノセレイマスとなる(Webster 3rd New International Dictionary (1993)は甲を本、丙を従としており、米語内でも揺れがある)。このように英語風のカナ書きは音節の認定に困難があり、カナ書きが不可能になる事態が予想される。一方、古典式に準拠したカナ表記の場合は、第1表のような表に照して前から順番にカナに転写していけばよい。

また、英語風の表記の場合、trackとtruckがカナ表記ではどちらもトラックになるように[æ]と[ʌ]とを書き分けられないので、閉音節にあたるaとuは同じ母音アで転写されることになる。これに米国英語の[v] (hot)も加わると、a, u, oの三種類の字母が同じアになってしまう。実際に、ギリシャ語系の語尾-osとラテン語系の語尾-usは英語風に書けばどちらもアスになってしまう違いがわからない。このように英語風のカナ書きには、もとの綴りがわからなくなる、同音異義語になるなどの問題がある。

このようなことを踏まえると口語として喋るのはとてもかく、カナ書きとしては英語風の表記は問題があることがわかる。カナ書きを英語風と古典式との端成分に分けた場合、古典式のほうに分がある。次に古典

式の派生系について検討する。

古典式のカナ書きは堅牢な体系をもっているが、地名や人名に由来する外来語についても古典式カナ書きを適用するかどうかは判断が分かれるところである。外来語は除外して純粋にラテン語あるいはギリシャ語から形成された学名に関して古典式のカナ書きにする方法がある。ここでは「原則古典式カナ表記」とする。純粋にラテン語あるいはギリシャ語から形成されたかどうかの判定はラテン語やギリシャ語の辞書や学名辞典(Stearn, 1992; 平嶋, 2007など)を参照してもいいし、経験ある分類学者であれば見当がつく。それを判別して表記することは学術情報の啓蒙普及する者がすべき貢献といえる。また、古典式を採用するとしても母音の長短を判断するかどうかは選択の余地がある。完全に古典語であれば辞書を索くなどして判断できるが、学名にありがちな造語について母音の長短を調べるのは不可能な場合も多く、どこまでできるか検討を要す。

一部の子音については現代風に変えた発音を採用する方法もある。これをここでは「現代の子音の古典式カナ表記」とする。対象とする子音はph, v, yである。phは[f], vは[v]の発音を採用し、カナ書きはそれぞれファ行とヴァ行となる。また、yは母音としては[i], 子音としては[j]という発音で扱う。おそらく体系化された学名の表記としてはもっとも日本で通用しているものと思われる。この表記法は分野は違うが化合物の日本語表記についての規則(日本化学会化合物命名小委員会編, 2000)とほとんど同じである。

「原則古典式」及び「現代の子音の古典式カナ表記」では外来語の地名・人名由来の語句については、臨機応変に現地音あるいは日本で通用している呼び方を適用する。たとえばchは古典語では[kʰ]でカナ書きするならばカ行であるが、chを[k]とは呼まない綴りから造語された学名もある。日本で言えば、*chishimaensis*(千島産の)や*chichibuensis*(秩父産の)が該当する。これらをキシマエンシスとかキキブエンシスと呼ぶのは、正則の古典式としては妥当であっても、日本人に意味を伝えるという点では劣る。*yedoensis*(「江戸産の」といった語をユドエンシスと無理に古典式に書く必要はなく、エドエンシスと書いたほうが語として通じるためである。ただ、学名のどれが地名・人名由来の語句なのかは、どれが本来語かどうかの判別と同じで、知識を要す。

更に子音は全て英語風の発音にする方法もある。「現代の子音の古典式」の子音に加えて, c, ch, g, j, th, xが対象となる。Inoceramus イノセラムスが相当する。ここではps, ptを英語風にs, tとするのは保留する。この方法でも母音は古典式のままで英語「式」とはいいがたいが、ヘボン式ローマ字と同じであるので「ヘボン式カナ表記」とする。ヘボン式が英語「式」とはいえないことは、^{ミネ}峰のヘボン式ローマ字はMineであり、英語の鉱山と同じになる(同様の例は、伊達Date, 呉Kure cf. cure)ことから明らかである。もちろん、英語風の呼び方にしておいたほうが日本人にとって通じやすい場合もある。Hibiscusという植物は古典式準拠のカナ書きならヒビスクスで、多くの人は聞いたことがないであろうが英語風に書けばハイビスカスであり、広く知られた植物であることがわかる。逸見(2000)はシーザー(Caesar)を例に日本では定着した言葉ほど英語風に呼ばれると述べている。学名でも、ハイビスカスのように古典式あるいは教会式・ドイツ式よりも英語での呼び方が定着したものは多い。Ammonite(s) アンモナイト, Belemnite(s) ベレムナイトのように -(l)ite (石の意)とした学名は英語風のイトというカナ書きが定着している。そのようなものに対して一律古典式準拠の呼び方を提示するのがわかりやすいかどうかという問題がある。河野(1994)が述べているように、カナやアルファベットのような表音文字であっても文字列が第一義的に示しているところは語であって音ではないので、社会的に通用しているカナ表記を無視して原則を押し通すことにも無理がある。

では、社会的に定着しているカナ書きがあればそれを採用することにしよう。それでも問題は残る。1つは、ある語が社会的に定着していると思うかどうかは人によって異なり、線引問題になるためである。もともと分類学を修めている人口は少ないため、小さなコミュニティだけで定着したかどうかを判断することも難しい。更には、ある学名それ自体はまったく知名度がなくても語幹や語尾などの部分部分で見れば、通用している表記がある場合も多い。たとえばTaxodioxytonという絶滅したスギ科の樹木がある。日本の古第三系からよく産し、地質標本館でも展示している。これについて一般に通用しているカナ書きはないと思われるので、タクソディオクシロンという「現代の子音の古典式」のカナ書きに一見すると決まりそう

である。しかし、語幹のxylonだけを見ると、これは樹木という意味のギリシャ語で, xylene (キシレン, 英語風にはザイリーン), xylitol (キシリトール, 英語風にはザイリトール) など広く通用しているカナ書きがある。このカナ書きを採用すると、タクソディオキシロンというカナ書きになるが, taxoのxとxylonのxのカナ書きが違ってしまふ。統一するとタキシディオキシロンになる。しかし, taxoのほうはtaxonomyのカナ書きのタクソミーのほうが定着している。このように社会的に通用している表記を導入しても、あちら立てればこちらが立たずのジレンマに陥りかねない。

学術情報を普及する立場としては古典式準拠のカナ表記(おそらくもっとも通用している「現代の子音の古典式カナ表記」)を第一候補として提示しつつ、「ヘボン式カナ表記」にも気を配りながら、括弧書きや註の形で既に知られた別の呼び方を提示していくのがよいのではないだろうか。といっても、スペースの限られた展示板などで両方を並記するのは困難であり、どちらかを優先させなければならない。表記の問題には最終的解決はなく、いつまでも問題が残る旨、小泉(1978)は述べている。

5. おわりに

古典式準拠のカナ表記は英語風発音との乖離^{かいり}が著しい場合がある。それは古典式の欠点であるが、本来の綴りをなるべく保存する格好でカナ書きされているので本来の綴りを復元することが可能である。英語運用能力との関係でいえば、学名のカナ表記を英語風にするのではなく、綴りから英語の発音規則に照して英語として発音するのが王道だと考えている。なぜなら、カナ書きには表記の揺れがつきまとうが、学名は定義により、揺れがまったくないからである。少なくとも不規則に英語風にカナ書きされたものより古典式の表記のほうが、英語で発音し直す時の困難が少ない。不規則に英語風にカナ書きされたものはもとの綴りを復元できないからだ。

ラテン語の各言語での発音の仕方は、それぞれの言語のアルファベットの呼び方の癖を反映している。これを把握することで逆に非英語圏の話す「訛った」学名や英語の発音の聞き取りに活かせるという波及的な効果が期待できる。その目的ではラテン語の後裔のスペイン語とポルトガル語は話者も多く、割愛し

たのは残念だった。

表記の混乱について可能な解決が少なくとも1つある。それは個々の人が混乱を上まわるだけの知識を身につけることである。本稿がその一助となれば幸いである。

謝辞：黒田耕平氏(琵琶湖博物館当時、動物学)並びに山下太郎氏(学校法人北白川学園、西洋古典学)には原稿を読んでいただき、貴重な助言と励ましを受けた。

文 献

- 地学団体研究会編(1981):地学事典, 平凡社, 1612p.
 地学団体研究会編(1996):地学事典(新版), 平凡社, 1852p.
 Fenton, C. L. (1937): Life Long Ago-the story of fossils, John Day, New York, 280p.
 平嶋義宏(2007):生物学名辞典, 東京大学出版会, 1292+52p.
 逸見喜一郎(2000):ラテン語の話, 大修館書店, 292p.
 風間喜代三(2005):ラテン語・その形と心, 三省堂, 282p.
 小泉 保(1978):日本語の正書法, 大修館書店(日本語叢書), 456p.
 小泉 保(2003):改訂音声学入門, 大学書林, 237p.
 国際音声学会編・竹林 滋(訳)・神山孝夫(訳)(2003):国際音声記号ガイドブック, 大修館書店, 320p.
 河野六郎(1994):文字論, 三省堂, 161p.
 呉 茂一・泉 木吉(1977):ラテン語小文典, 岩波書店, 172p.
 MacGee, T.J., Rigg, A.G. and Klausner, D.N.(ed)(1996): Pronunciation of European Languages in the Middle ages and renaissance. Indiana Univ. Press, 320p.
 Morwood, J. (1999): A Latin Grammar, Oxford, 216p.
 日本化学会化合物命名小委員会編(2000):化合物命名法(補訂7版), 日本化学会, 132p.
 大西英文(1997):はじめてのラテン語, 講談社(現代新書), 287p.
 Pullum, G. K.・Ladusaw, W. A.・土田 滋(訳)・福井 玲(訳)・中川裕(訳)(2003):世界音声記号辞典(原題:Phonetic Symbol Guide, 2nd ed. 1996), 三省堂, 349p.
 Stearn, W.T. (1992): Botanical Latin: History, grammar, syntax, terminology and vocabulary (4th edition). David & Charles, Newton Abbot, 560p.
 和田裕一(1989):ラテン語学名のカナ表記が示唆するもの, 民博通信, 国立民族学博物館, 44, 12-21.
 Wheelock, F.M. and LaFleur, R.A. (Revised) (2005): Wheelock's Latin (6th edition), Collins, 560p.
 山田正春(1978):ラテン語と学術用語, 地質ニュース, 286, 37&58-63.

TUZINO Taqumi (2010): Short introduction to transcription from Latin Linnaean name to Kana scripts.

<受付:2010年4月15日>